
ラブソディ・オン・ブルー

廣瀬 るな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブソディ・オン・ブルー

【Nコード】

N4991D

【作者名】

廣瀬 るな

【あらすじ】

自分に魅力がないことに疲れ、平凡に暮らすOL砂羽。そんな彼女に、穏やかな生活を夢見させてくれる年上の男性との出会いは、とても相性の良いものに思えたのですが……。電子コミックで発売されました

プロローグ（前書き）

ビターでシリアスなハッピーエンドラブストーリー。リアルでありがち、頷けるような非日常、をお届けしたいと思います。

プロローグ

プロローグ

どこでも交わされる話。

“相性って、どこで決める？”

よく午前1時の居酒屋や、午後1時のトイレで聞こえてくる話。

“って、軀のこと？そりゃ、いたしてみないと分かんないよ。”

とくるか、

“やっぱ食い物って大事だね。うちの両親はいつも赤出汁か白みそかでもめてるよ。”

とくるか、

“実際暮らしてみなきゃ分かんないじゃない？”

つてのもありで。

そこに

“相性以前に、この人じゃなきゃ駄目だって想える人が本当は一番なんだけどな。”

と、会社の昼休み、だべる女の子達の会話を聞いていて呟く女がいて。

“ってかさ、何もかも忘れて、安心してさ、ぐっすり眠らせてくれる女だったら、俺、一生捧げられるぜ。”

とかまし、

“馬鹿じゃネエの”

とビールを注がれる男がいて。

はてさて、何をジャストフィットと言いますことやら。あなたにとっての相性の良さって、なんでしょう。

第一話 出会い

1 出会い

冷房の効かない機械室で佐伯真治さえきしんじは黙々と仕事をこなしていた。出入り口を開け放つても気温は35℃を超えていて、後輩の東山に至っては、制服を脱いでタンクトップという姿になっている。脱水を起こさない様に傍らにおいていたペットボトルももう空っぽになっていた。

「あっちイッすね。」

そう言う東山の表情は苦しく、汗が滝の様に流れている。

「ああ、そうだな。」

佐伯はさらりと流し手を休めない。愚痴っても仕事は終わらない。それなら無駄な事はしたくなかった。

いつもは大口の現場監督が新人養成担当の彼がここにいるのは、たまたま夏期休暇シフトの都合で人手が足りなくなったからだ。久々に自分の手を動かして、つくづく自分はブルーカラー気質だとは思う。中途半端なディスクワークよりあくせく働いている方が働いている気がするのだ。

とその時、昼休みを告げるチャイムが鳴った。

ここは、東京の外れにある小さなオフィスビル。廊下越しにOL達が笑いながら食事に向かう足音が聞こえた。

「私たちもそろそろ昼食にするか？」

その声に東山の顔が緩んだ。

いそいそと出口に向かいかけた時、その出口で彼は女の子達と鉢合わせしたようだ。

「きゃあっ」

20歳そこそこの女の子達は、可愛らしい悲鳴を上げる。

「済みません。」

それから東山のこぼれんばかりの笑顔に微笑みを返し、いくつか言葉交わす。

「じゃ、後で差し入れ持ってきますね。」

そんな風に彼女達は去っていった。その後からやって来た制服の女性が部屋を覗く。すんなりとしたシルエツトは部屋を覗いただけで去って言った。

その30分後、佐伯が部屋に戻るとそこには古びた扇風機が一つ。会社の備品です。良かったら使ってください。後で取りにくるのでそのままでもいいです。”

回すと少しホコリの匂いがするそれは、くたびれた音を立てながらも、意外なほど快適な空間をもたらしてくれた。誰が置いていたのか、彼には大体の想像がついた。“御局様”と呼ばれるあの女性だ。佐伯はふと笑みを漏らした。今時それは無いだろうってほどべたなあだ名。廊下で耳にした時には耳を疑ったほどだった。だから興味を引いたのだが、すれ違った噂のその女性は古びている訳ではなく、ただ（多分だが）年齢以上に落ち着き過ぎているだけだった。彼女が廃材を仕舞っておく倉庫からこれを出して着た事は確実で、しかも喜んでもらえるか分からず、礼も期待せず、名前さえ無い几帳面なメモ書きが有るだけ。彼女らしい。何故かそう思った。それが出会いだった。

結局扇風機は2日間まるまる稼働した。

東山には毎日可愛い女の子達からの飲み物の差し入れが入る。高校野球の球児だった青年はここでも王子張りにさわやかな魅力を発揮しているらしい。その中の一人にお気に入りを見つけた彼は、

「お礼につて食事おごる約束しちゃいました。」
と笑っていた。

そして佐伯も、まだ夕焼けにはほど遠い6時の人気の無くなったオフィスで高橋砂羽^{たかはし さわ}に礼を言った。

「助かりました。おかげさまでずいぶんと楽に仕事ができました。」

その左の薬指には銀色のリングが光っている。それさえ無ければ自分はその魅力だと自負する彼は、ためらう彼女を強引に食事に連れ出した。

本当に食事をとって軽くビールを飲むだけ。9時には彼女を近く駅まで送りさよならをする。それでも二人の距離は近づく。

カウンターに並んでほんの少し酔いの交じった吐息がお互いの鼻腔をかすめた。

“こんな風に違う人生が始まるのも悪くない。”

男は今年36歳。結婚の厳しさも生活の現実も体験し、夢見る年齢は過ぎている。それでも、この出会いを大切に思った。

第二話 過去と男（前書き）

12歳以下禁止表現が出てきます。お心当たりの方は、ご免ね、御退出。

また、表現は派手ではありませんが、何となく痛々しい感じもあります。絶対甘党の方も、ゴメンナサイです。

第二話 過去と男

2 過去と男

砂羽は戸惑いを隠せなかった。独りシングルベッドに丸くなりながら、佐伯との関係を考える。

いつの間にか“軽い食事”会は回数を重ね、おしゃべりをするだけ関係のまま続いている。何しろ10時には彼の方から“帰ろうか”と声を掛けて来るのだから。

それでもゆっくり彼に心が傾こうとしている自分に戸惑った。佐伯は穏やかに笑い、時々そう長くは無い髪をかきあげた。決して瞳を逸らす事無く見つめる瞳はビー玉を宝物にする子供の様にきらきらと光っていた。

今まで互いをさらけ出せるような深い付き合いをした事が無い。セックスでイクことは覚えたけれど、本当はその前にあるはずの愛が解らない。なんだかいつも夢みたいな恋愛に憧れているだけ、そんな気がしてならなかった。

不倫なんて考えた事は無い。でも、話している限り、彼がそういう人間とは思えない。つまり、何となく、堅い。

こんな時友人の菜々子に相談する事も考えたが、さすがに不倫は止めると言われるに違いない。

ため息ばかりが落ちていく。

こんな魅力の無い女に彼は何を期待しているんだろう。

その時携帯の呼び出しがなった。その聞き慣れた音に砂羽の体がぴくんと跳ねる。

「あ、はい。私。」

相手が誰だなんて分っている。

“俺。宮内。いまから行ってもいいか？”

「何よ、また彼女と別れたの？」

“仕方ネエじゃん。”

電話越しに子供じみた良い訳を吐く男がいた。

“仕事と私とどっちが大切なのって言われたらなあ、そりゃ。嘘付
こうと思っただけ、顔に出ちまったみたいでさあ。”

彼の本気なのか冗談なのか分からない笑顔が砂羽の前で揺れた。少しためらった、その後、

「いいよ、おいで。」

とあっけなく、彼女は電話を切った。

それから30分後、ほっそりした体躯の酔っぱらった男が独り、彼女の部屋に転がり込んだ。

彼は何も言わない。ただ、彼女を抱きしめ、ため息をついた。ベッドが軋む。二人とも“好きだ”とか“愛している”なんて一言も言わない。ただ、することをするだけ。

男は彼女の軀を心得ていて。

彼女の燃え上がる場所をピンポイントに責める細く長い指先。絡み付く様な舌先と、これ見よがしにかき立てる生々しい水音。

思い起こせばこんな関係ももう8年も続いているのだから感じてしまうのも仕方が無い事だろう。

砂羽は認めたくはないのだけれど彼の言う通り“軀の相性がいい”って言うのはこういう事だっと思った。

どんな男に抱かれていても今ひとつ感じない。相手の欲望ばかりが鼻についた。ただ宮内達^{みやうちだすむ}だけは別。彼の舌が自分の唇を犯すたびに、泣きたくなるほどの快感に襲われる。堪えようにも堪えられない悲鳴が軀の奥底から湧き上がり、女の本性が現れる。

この男はフェロモンを撒き散らしているに違いない。

切羽詰まっていたはずの男にさんざん焦らされて、女は涙声で懇願する。

「頂戴。」

砂羽は彼の軀を強く抱きしめ、彼の体臭を鼻孔一杯に吸い込んだ。

薄れていく記憶と、どこかで聞こえる女の悲鳴。

明日になったら、また後悔し虚しさに泣く事を分っていて、彼女は彼の腕の中で微睡んだ。

目を開けるとテーブルには一枚のメモが残っていた。

“ありがとう。いつも慰めてくれて。”

今度彼に会うのはいつになるのだろうか。この次彼が失恋するのは6ヶ月先か、3ヶ月先か。最近そのペースが速くなっている、そんな気がするけれど、こんな関係は早く清算しないといけない、そう頭では解っていて実際には縁を切る事が出来ない自分が恨めしかった。

初めて宮内に抱かれたのは20の時。手ひどい失恋の後だった。

“結婚しようか。”

ふざける当時の彼氏の囁きに舞い上がり、夢を見ているようだった。いつも笑い顔を絶やさない繁は彼女が憧れていた先輩だった。そのはずが、付き合ってから初めての彼の誕生日、彼の大学の研究室にやって来たのは

“繁が愛しているのはこの私なんだから！”

と泣きながら掴みかかってくる女。そして絵に描いた様な修羅場、と言いたい所だけど……。

彼女は取り乱すことなく、まるで他人の痴情を見ているかのようにさめている自分を自覚していた。

ひらひらと着飾っているだけの、自分より頭の悪い女だってその時は感じた。女の武器を見せびらかして、子供の様にだだをこねてだから彼はこんな女より自分を選ぶと思った。“誰よりも愛している”ってつい昨日も言われたばかりだし。

“繁の気持ちは、繁が決めることよ。”

自信に満ちた声で跳ね返したつもりだった。でも繁は

“ごめん。”

と言ったまま砂羽に背を向けた。

“仕方ないわね。”

悲しみて真っ白になった頭に浮かんだのはその言葉だけ。
そして彼とは二度と連絡が取れなくなった。

落ち込む彼女を軀で慰めてくれたのが宮内だった。酔っていた事も有りもう誰でも良かった。

「お前、初めてかよ。」

ラブホテルのベッドで彼は唸った。

「うるさいわね、回数が少ないだけよ。ま、抱くほどの価値のない女だったのよね、私。」

ぼんやりとした鮮血の滲むシーツの上で、痛みを堪えて彼の上に跨がった。

「あたしだって、やってらんないのよ。今晚くらい、慰めてよ。そうしたら私、一生宮内に恩をきるから。」

あの日以来、砂羽は深酒をしなくなった。

可愛いなどと見え透いた嘘をつく男と、流行の化粧にビトンのバックを持っている女も嫌いになった。

それから彼との奇妙な関係が始まった。宮内は彼女と別れるたびに砂羽を求める様になった。それもたった一晚だけ、狂った様に何回も抱いた。その癖、サークル仲間で会うときはそんな素振り是一片も見せなかった。

「お前、まだ独り身かよ。早く男作れ。さびちまうぞ。」

「お前って本当、男運が無いってヤツ？今度俺の友達紹介しようか？」

そう言われ何人かの男とも大人のおつきあいをした。

その度に脳裏に浮かぶのは宮内のあの瞬間の切なげな顔で、砂羽は自分が本当は誰に恋をしてしまっているか、悲しいくらい自覚していた。

だからこそ、宮内を忘れさせてくれるかも知らない佐伯にときめ

いた。彼は今までのどんな男とも違う、そんな気がしたから。

第二話 過去と男（後書き）

砂羽ちゃんよどみ系。がんばって平凡に仕上げています。でも、平凡でも、その人その人の大切なヒストリーが誰にだってある訳で、そういう事、書いていけたら良いなって、思っちやります。

第三話 距離

3 距離

砂羽と佐伯はメールを交換して時々二人で呑む、そんな関係を続けているうちに夏が終わった。

佐伯にしてみれば砂羽が尻込みをしている事位簡単に知れた。何しろ指には結婚指輪をしている男だから。

東山の情報に依ると、高橋砂羽という女性は短大を卒業してすぐ就職した口で、職場では二番目に古株の女性だそうだ。もともと男性従業員の多い会社で結婚退職する女性が多いと言う今時希有な会社だった。しかも彼女は地味な性格で、年頃の女の子達のようにブランドものやファッションに興味が無く、独身の女らしくコンパに出かける事も無いと言う。弁当さえ手作りで、しみつたれているとの声さえ有ると言う。

「今時、可愛くないっすよね、そんな女。」

笑う東山に、そんな事はないと佐伯は心で呟いていた。ステイタスしか求めない女はこりこりだった。

現に彼女の着ている服は目立つという点では失格かも知れないけれど、彼女らしい雰囲気を作り出す事には成功していると思えた。

彼女の好きなスタンドネックのシンプルなニットシャツは彼女のその隠された部分の想像をかき立てるし、膝丈のタイトスカートが形作るウエストから流れ出るラインはとても滑らかで、佐伯にとっては控えめな色気を感じていた。

そんな彼女がジャズの流れるダイニングのテーブル越しに佐伯を見つめていた。

「あの、自意識過剰だと思われるかも知れないんですけど……」

「

そう言い始め、ふと目を逸らす。その仕草を男は可愛いと思った。

「佐伯さんと私は友達なんですよね？」

それから流れた沈黙は、砂羽には痛かった。なかなか返答を返さない佐伯をそつと上目遣いに覗き見すると、柔和な瞳が笑っていた。

「私がそんなつもりで誘っていると思いましたか？」

「あつ、いえ、その……」

言葉を濁しながら彼女は考えた。この返事って、どっちの意味なんだろう……。彼は“友達”と言ったのかそれとも……。

そんな彼の大きな手が砂羽の手をそつと握った。

「はつきりさせましょうか？」

それからさも嬉しそうに、

「私の自宅に来ませんか？」

そう誘った。

自宅に行つて奥さんに紹介しようとしているのか。そんな風に砂羽は考えた。確かにそうなるといかにも“友達”だけど、それは何やらおかしい気がした。

彼のマンションは都心の9階。

「低い割には夜景がきれいなんだよ。」

ととうされたリビングには女性の気配がまったくなかった。別居中、その言葉が砂羽の中をよぎっていく。

勧められたソファに座る事を拒みながら、騙されたと思った。

「私、不倫には興味有りませんから。」

この一言で二度と佐伯には会えなくなる、そう思い悲しかったけれど、他人の家庭を壊してまで手に入れた人じゃない、そう自分に言い聞かせ、軀を硬くして佐伯の反応を待った。

恨む様な瞳の彼女に佐伯は笑顔で応えた。

「解っているとも、君はそんな人じゃない。」

彼にとつては、砂羽がきつぱりと言い切ってくれた事が嬉しかった。都合良く何もかもを無視してセックスにのめり込むほどもう若くはないし無分別でもない。

彼はサイドボードの一番上から、ブロードばりの小箱を取り出した。

「？」

砂羽は訳が分からず彼の動きを追った。

蓋を開けたそこには佐伯がつけている指輪とそっくり同じものが収まっていた。ただ一つ、サイズが小さい事を除いて。

彼はゆっくり自分の指輪を外すとその空いているくぼみにそっと押し込み、彼女の表情を探った。

「5年前に離婚しているんだ。」

啞然とする砂羽に彼は苦笑した。というより、あまりに予想していた通りの反応だったのだ。

彼の腕が軽く砂羽を押しやり、彼女はすんと腰を下ろした。二人の距離が近づく。すぐ目の前のテーブルにこれ見よがしに箱が置かれ、彼女は目を離す事が出来ない。

「別に彼女を忘れられなかった訳じゃない。他に男作って出て行っただけだ。未練は無いさ。ただ、女性とはしばらく距離を置きたい、ただそれだけのことだったんだ。」

そう言いながら彼女が見つめている事を意識し、愛の証であるはずのその小箱を掌で床に落とすと、するりと砂羽のとなりに座りその顎を摘んだ。

「思っていたより期間は長くなってしまったけどね。」

日頃穏やかな彼の瞳からレーザー光線が発射されているようだった。初めて見るその瞳の色にたじろぎながら、砂羽は息を詰めた。

「君が好きだ。」

ほんの少し、唇が触れるか触れない瀬戸際で彼が囁く。

「君と一緒に生きていきたい。」

首筋にかかる甘い吐息に彼女の思考は停止しそうだった。

「やつ、どうして私なんですか？」

慌てて彼を押し戻そうとし、その両手首を掴まれた。

「美人じゃないし、かわいげが無いし……」

そう、会社の廊下越しに初めて見た彼の背中には、自信とある種の余裕が見え隠れしていた。そこに男らしい包容力を感じ、憧れていたのが事実だから。その上、彫りの深い顔は舞台俳優の様に知的で。しかも手に職があり、地に足着いた生活をしている。そんな“いい男”が自分に興味を持つなんて……。

「それに欲もない。」

佐伯はにっこりと微笑んだ。

「必要以上に自分をよく見せようとは思わないし、自分らしく生きようとしているじゃないか。」

そのまろやかな声に、この人は自分言つて欲しいと思う言葉を知っている、そんな気がした。

「誰だつてしているような世の中なのに、不倫は嫌だつてはつきり言えるし。現に私自身何度か誘われたこともある。でも、君はきっぱり否定してくれた。そんな君となら価値観が一緒に、分かり合える関係を築ける、そんな気がするんだ。」

彼は緩やかに呼吸を吐き出し、

「砂羽。」

初めて彼女を名前で呼んだ。

「結婚を前提で、付き合つて欲しい。」

彼の熱っぽい瞳と、少し掠れた声が砂羽の心を掴んだ。

「わ、私でいいの？」

さも嬉しそうに微笑んだ佐伯は、彼女を包み込むと、耳元で囁いた。
「付き合つて6ヶ月で婚約して、その6ヶ月後に結婚。それ以上は待てないからね。」

身長は180cmも有ろうかと言うその軀で抱きしめられ、砂羽は自分が女だと強く感じていた。もともと中高とソフトボールをしていた軀はお世辞にも華奢じゃない。身長も168cmもある。そんな事を彼はものともしない。

男の軀が重なる事が気持ちよかった。みっしりと重くて、それで

いて全体重をかけてくる訳じゃない。

「ふっあっ……。」

駆け抜ける快感に思わず軀がしなる。

“ 宮内とは違う。”

そんな言葉が頭の中に浮かんだ。彼は若さの持つ荒々しい波で、息もつけないほど強引に砂羽をさらって行ってしまふ。でも佐伯は違う。彼女の瞳の奥を見つめ、砂羽の感覚を引き出し、二人手を取りながら花園を駆けようと。それは戯れる二匹の蝶の様な感触だった。

「佐伯さん……。」

この人となら、そう思えた。この人とならただ与える関係じゃなく、与え合える仲になれるかも知れない……。

「私で、よければ。」

声が震えそうだった。

「真治って呼んでくれないか？」

彼女の柔らかな胸が押しつぶされ、二人の心音が重なる。

「真治、さん。」

その夜砂羽は初めて宮内以外の男の腕で我を忘れた。

第三話 距離（後書き）

年寄り臭い言い方ですが、書いていて思います。女の幸せって、何でしょうかね。

第四話 社交辞令

4 社交辞令

資料室でかち合った同僚の鬼怒川きぬがわが、さりげなく宮内に話しかけた。

「以前俺に紹介してくれた女だけどさ、確か、高橋だっけ。」

「ああ。」

宮川はうなずいた。砂羽の事だとすぐに解った。

「あいつ、お前の女友達だったよな。」

「そうだけど。」

それから彼は言いづらそうに言った。

「俺見ちゃったんだよ。あいつさ、不倫してんだぜ。」

それから彼の肩をポンポンと叩いた。

「ま、友達は選べや。」

今のは何だったんだ？宮川の中には？マークが飛び交っていた。説教か？忠告か？

確かにあいつとはそれなりに付き合いもあり、友達だと思っていた。お互い辛い時に慰め合える友達だ。だから、自分の同僚に砂羽の事を紹介できる訳だし、もし尋ねられたら、彼女が幸せになつてくれるなら嬉しいと答えられると思う。それなのになぜか、今彼の心を支配しようとしていたのは、まったく別の感情だった。あの保守派の彼女が

「不倫、か。」

いつになく砂羽が本気だ、そんな気がした。

砂羽は昔から必要以上に落ち着いている女だった。だから、20年上の高校の時の先輩に振られたとやけ酒を煽る姿は本人とは思

えなかったと記憶に残っている。

「やっぱ、可愛くないのが駄目ってことですかねえ。」
ロックグラスが空になる。

「別れないって言って、こっちもやり返すぐらいの気持ち、無きや
いけなかったのかなあ。」

「ま、吞め。」

宮内は自分の酒を勧めた。彼女は唯一友達付き合いできる女だった。
それでもこのまま持ち帰ってしまうのも悪くない。そんな下心は有
った。女は食ってみなけりや解らない。

そして彼は特別な人間や特別な関係、例えば恋人だとか親友だと
か、に縛られる人間ではなかった。

彼女と知り合ったのは天体観測のサークルでの事だった。一目見て
“恋愛の対象じゃない”

そう思った。はつきりとした理由なんか無い、ただ漠然とときめか
ないだろうと思ったただだ。いや、それ以外の何かを感じていたと
いうのが正解だろう。案の定、その夜まではまったくその気配のな
かった二人だった。

男にしてみれば、恋愛とセックスは別物で、友情とセックスも別
だった。

ただ誤算だったのは、彼女が慣れていない、もしかして初めてか
もって事だけ。

ほんの少しの罪悪感。それでも必要以上に積極的な彼女の仕草に、
これはこれでいいかも知れないと思った。

それから、付き合っていた彼女と別れる度に砂羽の部屋に行く様
になった。それはあの夜の約束、

“この次は私が慰めてあげるから。”

をお互い果たすため。そう自分にいい聞かせながらその実、砂羽の
軀にハマってしまったというのが本音だった。

恐ろしく相性がいいとは自分たちの事だと思う。

他の女を抱きながら、砂羽の体臭を思い出し何度も鳥肌を立てた。

自分の軀の下にあるきれいな軀が、砂羽だったらもつと感じるのに、と。

だから彼女を抱くのは、ある意味復讐だった。自分が忘れる事が出来ない砂羽という女に、自分という存在を忘れさせない為の。

明日はバレンタインという夜に、砂羽を抱いたことが有る。

「ねえ、私たち、このまま付き合っちゃわない？相性いいみたいだしさ。」

たつぷり絡み合った気怠さの中で彼女が囁いた。

「馬鹿言うなよ。」

男は呆れた様に呟いていた。

「俺達、軀の相性がいだけだろ？お互い勘違いすると、不幸になるぜ。」

その時は本心からそう思った。

「そりやそうだ。」

笑って誤摩化す彼女が本気で言っていた事位察していた。でも、宮内はそんな彼女に伝える気持ちにはなれなかった。

しなだれかかる砂羽の肩を抱きながら街を歩いたり、モデルばりのミニスカートをはいた彼女とドライブしたり、彼女の髪を撫でながら友人に見せびらかしたり、そんなイメージはまるで沸かないのだ。

そのくせその関係が壊れるのは怖かった。

夜中、といっても11時を少し回ったときの事だ。宮内の携帯がこんな夜にお似合いのジャズのスタンダードナンバーを奏でた。

「出ないで。」

女が囁くから、

「仕事だよ。」

と無理矢理に電話をつないだ。

「もしもし。」

それは聞き慣れた女の声。それでも、彼女が選んだこの曲が流れるのは初めての事だった。

思わず唾を呑み込む。

来たか。

ベッドを抜け出し、女から逃げる様にベランダへ抜けた。

予感していた別れの言葉を告げられ、ああ、そうだな、と独りうつむいた。

「ま、幸せになれよ。」

彼女がありがとうなんて言うから、泣き出してしまおうかと思った。

訳知り顔で頭を撫でられ、砂羽は

“これで良かったんだ”

そう思えた。抱きしめる彼の顔はいつもの様に穏やかで、波の一つも立っていないようだ。

それは二人が大人の関係になって二週間後の事だった。

普通、付き合い始めた彼女にセフレがいたと言われたら引くと思う。それを、顔色一つ代えずに彼は受け止めこう言った。

「こんな事を言うのは何だけど、私たちの年齢で今まで何も無かったって言う方がおかしいんじゃないかな。」

彼女にとっては一世一代の告白だった。それを佐伯はこともなげに言い抜けた。この人に応えたい。砂羽の胸がじんわりと熱くなる。わざとらしいと思いつつ、それ以外にとる方法が見つからなくて無言で携帯を取りだすと、一度もかけた事の無い彼の番号を探した。「もしもし？高橋です。砂羽です。」

思いのほか冷静に声が出た。佐伯の顔を見る事は出来なかったけれど、それでも彼に聞こえる様にはつきりと宮内に別れを告げる事が出来た。

「もう、お終しまいにしたいんだけど。というか、させて。私たちの関係。・・・本命、出来たから、彼の事だけ愛していきたい。ご免、一方的で。でも、もう二度と宮内と・・・したくないから。」
案の定、彼はあっさりと引いていった。

『元気で。』

なんてごく普通の友達同士が交わす社交辞令を残して、携帯が途絶えた。

登録ナンバーの着信拒否と、その登録の解除を済ます事なんて1分もかからない。これで彼との系はあっさりと切れたも同然だった。職場の番号はお互い知らない。アパートの合鍵を渡した訳じゃない。ましてやあの宮内が女で不自由するとは思えない。二度と彼がここに来るとは思えなかった。

こんなに簡単に別れられるなんて・・・。

本当は宮内の事が好きだった。彼は“軀だけ”だと言うけれど、その彼の仕草の一つ一つ、弾ける様に笑う声の響き、タバコをくわえ一瞬済まなそうな表情をしてから火を付けるその指先、ふと見せるぼんやりとした表情、軀を重ねているときの熱に浮かされた様な瞳、それから砂羽の家を出る瞬間に密やかに響くため息さえも。彼の何もかもが好きだったのに。

苦い何かを呑み込みながら、

「やっと、別れられた・・・」

そう呟く砂羽の横顔に、佐伯は彼女の本心を垣間見た気がした。

佐伯が初めて彼女を見たのは実はあの時をさかのぼる事1ヶ月になる。その時の印象は“不器用”だった。いかにもイライラした感じのキャリア風の女性に道でも訊かれていたのだろう。人通りの少ない歩道にいる彼女は連れの“可愛い”女の子達よりも少し背が高く、微かに背中を丸め、必至になってその人に道を説明してやっているようだった。端から見て、連れの女の子は面倒くさいと顔に表

れていたし、肝心の女性は先を急いでいてぞんざいだった。

「お氣をつけて。」

彼女の小さな声が風に舞って耳に届いた。あの救われた様な、雨上がりの青空のような晴れやかな心地を今もまだ覚えている。

自分の氣持ちを内側に秘めてしまうタイプだと思った。伝えたい氣持ちが有るのに、相手を思いやり過ぎて肝心な所で押し切れない。そんな彼女を、もしかしたら自分は解つてやれるかも知れない、つまりは彼女になら自分を本心から必要だと思つてもらえるかも知れない、そう感じたのだった。

ぼんやりと瞳を上げた彼女を男は抱きしめた。

「大丈夫だよ。これからは、私がついているんだから。」

適正年齢というものは本人が氣づいている以上に大切だと思う。

つまり、女なら35歳までに子供を産みたい訳だし、男なら40までに子供が欲しい。肉体的な限界もある。子供を育てると言う義務を定年退職後まで続けるという事は容易じゃない。その現実を解つていない人間のなんて多い事か。

確かに佐伯は初めての結婚で失敗していた。今更の様に理由ははっきりしている。お互い表面だけを見て、過剰な期待をしていたからだ。大恋愛のはずが、いざ蓋を開けてみてお互い

“こんなはずじゃなかった。”

そう呟く二人がいた。

だからこそ砂羽とは穏やかな関係を築いていける、そんな氣がした。二人の間に燃え盛る恋心は無いと思う。しかし幸い、年齢は8年も違う。この差は大きいと思う。距離を保ち、ぬるめの恋をしながら平和な家庭を持てる予感が有った。

第四話 社交辞令（後書き）

お気づきの方も多いと思いますが、タイトルは間違いじゃないです。
言葉遊びみたいな感じです。

第五話 変化

それまで砂羽は男に気に入られる様に振る舞おうなんて思った事が無かった。それは宮内に対しても一緒だった。媚びが似合うのは可愛い女の子だけ。つまり自分がそれをやると不気味だと信じて疑わなかった。

そのくせ佐伯には可愛いと思って欲しいと思う自分がいて、なんとはなしに戸惑った。

仕事帰り、ふとウィンドーショッピングをしてみる。10月だというのにもうディスプレイは冬物に変わり、まだまだ先のクリスマスを予感させた。

中途半端な秋物のセール品が店の隅に有り、何となく自分と同じようだと感じてしまう。

「そんな事言ったら佐伯さんに失礼だね。」

彼女はそんな風に感じる自分が情けなかった。いつからこんなに自分に自信が無くなってしまったんだろう。

若い頃にはもう少し自分を信じていられたのに。

理由は解っていた。本当は繁に振られた事が原因じゃない。

以前宮内に本気になってしまった自分に気づいてしまい、思わず彼に告白をしてしまった事が有る。

“私たち、付き合わない？”

それを一笑にふした彼。

寝る事は出来てもこの女と付き合うのはご免だ。彼の片方だけ上がった唇がそう告げていた。

そう、あの瞬間から自分には愛してもらっただけの価値はないんだって思えてならなかったのだ。

少しずつ変わっていきこう。そう心に決めた。

佐伯さんはいい人だ。堅実な人柄で仕事も堅い。見た目も良い。

でもあいつの様に浮ついた感じの無いどっしりとした人だ。お金の
かかったアクセサリーで自分を飾ろうとしたり、必要以上に自分を
良く見せようなんてしないから。

そう言えばその台詞は、初めて彼に抱かれた日に彼から贈られた
言葉だったと口元がほころんだ。

浮ついた愛の言葉を言わない代わりにふとした仕草で大切にされ
ていると感じる。この人だったら、その外観やステイタスやセック
スのテクニクなんかを好きになったんじゃない、人柄を好きにな
ったんだって迷わずに言える、そんな気がした。

いつもの膝下のスカートを少し短くしてみた。カーデガンを短め
のジャケットに代えた。それに靴のヒールの高さを3センチ上げて
みた。それでも佐伯を見下ろす事は無いと知っている。定番だった
まとめ髪をおろすと、首筋を伸ばせるような気がした。

さばきの良くなった足下で彼との待ち合わせの場所へと向かうと
自然に足が早くなる。間に合うと知っていても、心が急^せく。

今晩は早く仕事が終わるから家でシャブリを開けて DVD で
も見よう、そう電話をくれた彼がデパ地下の並びで有名な惣菜屋
さんの紙袋を持ってその場所に立っていた。遠見に、時々になまり
と笑っては照れた様にうつむく、ある意味怪しいその姿に、

「嘘みたい……。」

砂羽は呟く。降って湧いた自分の幸運が信じられないほどだった。

ちゃんと背を伸ばし彼と向き合う。

「お待たせ。」

佐伯の嬉しそうな瞳は彼女が見上げるほんの少し上、つまりちょうど
いい位置に有った。

駅のロータリー脇を早足で駆けていった彼女の頬は赤らんでいた。
その横顔を見て宮内の頭の中に浮かんだのは“サウンドオブミュー
ジック”のタイトルトラックで歌うジュリーアンドリュースだった。

「畜生。」

自分がそんな言葉を吐いた事には気づかなかった。ましてや何故な
どとは。

やって来たのはほんの少しの出来心からだった。友達として送る
分には問題ないだろうと彼女に送ったメールは全てブロックがかか
った。彼女からのさよなら以来、ツキに見放されたようにろくなこ
とが起こらない。最良の馬は負けが込む。合コンは10・0の持ち
出しで、やって来た女の子達はそろいもそろってキティちゃんのバ
ックを傍らに携えていた。勘弁。取引先の部長はセクハラで訴えら
れていて、来期の契約が保留になり、契約相手の自分の会社まで品
位が疑われた。髪を染めたら緑色にされているし、その染め直しの
せいで肌の調子が悪い。やっと取れたコンサートのチケットは一階
席の後ろから3番目だった。

最低だった。

砂羽が何かしたに違いない。だから何となくあいつに愚痴ろうと
思っただけだった。

セフレはやめても、友達だろう？

彼女の上気した顔。いつもベッドで見ている顔とはまったく違う
その表情。ヒトとしてのごく普通の歓びの顔。

正直に、見たくなかった。

初めて言葉を交わしたのは、プラネタリウム。都会育ちの宮内
は満天の夜空に感動していた。そしてこの次のデートに今付き合っ
ている彼女を誘おうと考えながら思わず漏らしていた感嘆の声を笑
い飛ばしてくれたのが、隣に座っていた砂羽だった。

「こんなの、偽物。イミテーションに騙されて感動するなんて、損
だよ。」

何のてらいもなく言い放つ、こういう女とは付き合いたくないと思
った。人が一番隠している本心をずばりと見透かされそうで嫌気が
する。

せめて“そうかもね”って返す女が良かった。

「本当の夜空を見てみれば分かるから。本当のって言うのはね、人工の光の入らないきれいな空気のある所で見上げる星空なんだけど。そうそう、夜空って本当は黒じゃないんだよね。星達が瞬いていると、薄暗がりで青く光るんだよね。空気が。そう言うのを見ているとき、大海原に漂っている様な、なんて言えばいいかな、絶対的に一人ぼっちなのに、そのくせ誰かに守られて包まれているって感じになるんだよね。不思議。」

可愛いだけの女ならいい。適当な所で付き合っていられる。でも心に食い込んで来る女はご免だった。おふくろじゃあるまいし。一生を縛られるなんてまっぴらだ。

若い身空で馬鹿の一つ覚えみたいに同じ女しか知らない男を見ると可哀相になる。だから、真正面からものを見るこんな女とは付き合えない。そう自分で納得した。

第六話 本音

男には秘密が合った。それはとてもささやかな事で。でも肝心の彼にとっては悩み続けてもうすぐ10年にもなり、こんなものだと諦めて、そのくせ何か方法はないかと足掻く日々を過ごしていた。

ごく普通の人が、ごく普通に悩む病気。もとい、症状。

不眠。

眠れない夜が続く。単調なクラシックも面白みの無いミステリーも効かない。ましてやアルコールは同じ思いを繰り返し呼び起こし、男にとっては泥沼だった。

「畜生。」

潰れた空き缶が42インチのテレビをやり過ごし壁に当たり跳ね返る。

彼女に電話をすると、

“ あ、はい。私。”

決まってそう返事が帰って来た。その後ほんの少し息を呑む。

男は知っていた。彼女がディスプレイを見なくても電話の主を知っている事を。それから、男が何を欲しているかも。

彼女のシーツはいつもブルー。

“ よく眠れる色なんだって。”

花柄、無地、星の柄。ワッフルにエジプト綿。そして彼の好きなフランネル。2日に1回は替えているというそれはいつも清潔で、いつも同じ洗剤の匂いがした。

男は眠れない事実を誰にも言っていない。もちろん家族にも。誰にも言えない。医者にも行けない。病名なんてついて欲しくない。

市販の睡眠導入薬だつてまっぴらだ。第一、自分は正常だから。

無理に体を使う。外回りの営業の名前でダバ（駄馬）の様に一日中歩き回り、夜には24時まで開いているジムで自分を虐める。

セックスは特効薬。その後だけは眠れている気がする。どんな女でもいい。セックスはセックスだ。

それでも男は砂羽のベッドが好きだった。正確には彼女のシーツ。冷たくて温かい。

啼き疲れた彼女と眠る狭いパイプベッドでシーツの波に溺れる。

そのささやかな数時間だけは、確かに眠れていると確信出来る瞬間だった。

男は気がついた頃には体面を気にして生きていた。名前の通った大学に、ブランドもののスーツ。最新式の携帯に、流行の髪型。一部上場の会社の営業職に、いつでもきれいな彼女を連れて歩く。親には褒められ、友人には羨ましがられ、同僚にはひがまれて。

そのくせ28の今になって焦る事がある。

それほど努力をしなくても人並みに何でも出来た。だから苦しんでいる所を他人に見せた事が無い。ましてやなりふり構わず何かをやり遂げるなんて事は考えもしなかった。

今更その姿勢を崩せない。

会社提出のTOEICのスコアが800を下回らない為に英会話も週1で通う。何となく行っていると何となく耳が音を拾うから、なんとかなっているのが分る。でも正直CNNは聞き取れない。だからいざ最高点を目指そうと目標を決め頑張ったとして、果たして今以上の点数が取れる自信がない。860の壁は目の前に立ちふさがっていた。

乗っているBMWの支払いは月に8万。それにボーナスも飛ぶ。はつきり言つてキツイ。携帯代も服代も交際費もかさむ。いつでもリボ払い。でも止められない。

本当の自分は、小手先で生きている器の小さい小心者だつてばれ

るのが辛い。とりあえず金で買える事で誤摩化している。他人に

“カッコいいね”

って言われていないと自分の評価に自信が無いなんて馬鹿げていると思う。でもその罨から抜け出せない。

それ以上に本当に辛いのは、必死になって生きていこうとする力が自分には無い事。

砂羽の様に地味に泥臭く生きる事を格好悪いと思うと同時にひどく羨ましい。

学生の頃から住んでいる老朽化の進んだ安いアパート。洗面台に並んでいる化粧品はスーパーで売っている安物で、昔近所に住んでいたおばちゃんを思い出させた。

目立たない、出しゃばらない服のセンス。実用的な靴。流行を感じさせないバック。

彼女の生き方はアルミの弁当箱に詰められた昨日の残りのおかず。そして彼女は笑うんだ。

“その方が経済的でしょう？第一食べ物捨てると罰当たるんだよ。それに一日経った方が美味しいおかずがあるって知らないの？”

自分に“女の子”の魅力がないと臆病な彼女。実際そうだと思いながら、心のどこかでそれだけじゃないと知っている男。

彼女が惚れた“俺”は、作り物の“俺”

そのくせ一番情けない姿を彼女にだけは晒している事を彼は気づいていない。

何かの音で彼女は目を覚ました。薄暗がりで見上げた天井には見覚えが無い。生まれ育った実家の天井には木の年輪があった。そしてもう10年も暮らす東京のアパートとも違う。自分が誰か解らない、そんないい知れない恐怖が湧き上がり、

“ここは違う。自分の知っている場所じゃない。”

落ち着ける場所に帰りたい、そう遮る様に両手を突き上げ深く息をした彼女に

「どうした？」

穏やかな声で男が呟いた。それから夢うつつの佐伯は砂羽の軀をひと撫ですると再び眠りに落ちて行つた。

心臓がばくばくと鳴っている。

砂羽には時々こんな事があつた。異常なほど疲れた翌日、朝起きれずに現実と夢の狭間を行き交いながら、今いる場所が分からないとパニックを起こしそうになる。そんな時、必死になって自分を思い出そうとする。名前は高橋砂羽。3月4日生まれ。生まれは長野で育つたのは埼玉の外れ。3歳はなれた弟がいる。それからいつも記憶は決まってあの男を呼び出す。

彼のしなやかな腕、熱に浮かされた様な半眼の眼差し。あれほど自信過剰な男のはずなのに、ふとした瞬間どうしようもないほどの孤独を覗かせるその瞳。それはまるで生まれたての仔犬が、兄弟達が新しい飼い主にもらわれて行く中でたった一匹残ってしまった最後の様な、いい知れない寂しさを砂羽に訴えていた。

あいつに限つてたいした悩みじゃない、そういつも割り切ろうとしていたはずなのに、ふとした瞬間その事を思い出してしまふ。

宮内に対する気持ちは恋じゃなく、兄弟のそれに近いのかな、時々そう思う時もあった。もしあいつが辛いなら、何も問わないで抱きしめてやりたい、そう願つてしまふのだから。偉そうに言えば、癒してあげたいと思うのだから。彼とのセックスは最高だった。でも、こうして佐伯に抱かれる様になつて初めて気がついた。抱き合つた後、眠りに落ちるまでの余韻がどれほど幸せだったか。快樂の海を漂う。ただそれだけじゃなく、無条件に幸せな、それはほんの数秒かも知れないし、数分かもしれない。何にも要らなくて、この世に二人だけいればいいと感じるそのひと時を。

佐伯は大人。ただ燃え上がるだけの恋じゃなく、生活という基盤の上に愛を育もうとしている。それが物足りない訳じゃない。むしろ

る感謝している。ただ心の底に住む宮内をどうしても追い出せない。
“不実なのかなあ。”

そんな言葉が彼女の唇からこぼれた。

砂羽はカーテンの隙間から覗く半月をぼんやりと見上げた。

ラブソディ・オン・ブルー つづく

第六話 本音（後書き）

スターダストレビュー聞いてモチベーション上げてます。ついでと言っただけですが、皆様ぜひご評価のほどを……。お待ちしております。

第七話 引き金

本人達は良いのだろうけれど、12月24日の結婚式なんてはた迷惑だった。年末にスーツのクリーニングを確認したり、確実に休みが取れる様に調整したり。ただでさえ忙しいのに追い打ちをかける。まあ、確かに天皇誕生日で休みだし、朝から酒を呑み始めれば夜もゆつくりだろうから親族達もいいのだろうけれど。

宮内は目の前に運ばれたヒラメのソテーを口に放り込み、ひな壇の友人を見た。

それに今年に限って一緒に過ごす相手がいなかったのだし。

彼は注ぎ足されたビールを飲み干すと祝辞の為に立ち上がり、ビールを送る友人達に片手を上げて応えた。

「本日はお日柄もよく。」

退屈。

「新郎の川崎君は、」

昔っから馬鹿ばかりしていました。

「生徒会の実行委員で学祭を取り仕切りながらも、」

そう言えやこの頃、こいつの二股と俺の二股がバツティングしていたんだっけ？俺達義兄弟？

「いつまでも、お幸せに。」

まあ、上手くやれよ。

無難なスピーチに、お決まりの拍手。宮内は流されて席に戻る。

二次会はイタリアンレストラン。色とりどりの花に囲まれて、まるで披露宴を二回するみたいだと宮内は思った。

何しろ川崎はエリート銀行員で、しかも相手は大病院の娘だ。以前ならば羨ましいとさえ思はずのこの派手な光景も、今の宮内には虚ろに思えた。

恋愛結婚の様に取り繕っているこの結婚も結局は見せかけで、そ

れ以外の思惑が見え隠れしていた。

彼は自分が解らない。自分の望みが解らない。

川崎は近い将来彼女の父親の病院の運営に加わるのだろうか。それがこいつの野心なのか。それじゃあ、俺の欲望はどこに向かって
いるんだろう。

注がれるワインを軽く開ける。

3次会では嫌な噂を聞いた。高校で同窓だった吉野篤志がその大
親友だった常陸颯太の奥さんを寝取ったという。

「嘘だろう・・・？」

それはどう考えてもあり得ない話しで、宮内の頭は混乱していた。

「いや、本当らしいぞ。颯太は会社止めて岐阜の田舎に親父さんと
引っ越したつてよ。この前、葉書来たぜ。」

優等生を見るからに“演じていた”吉野は、ある意味非常に生意
気で生徒であろうが教師であろうが気に入らない相手には徹底して
辛辣だった。そして颯太はあらゆる拘束を破る事で有名な“やんち
や坊主”そのくせ憎めない魅力の持ち主だった。水と油の様な二人
だったが、その“やりたい様にやる”精神が二人を強く結びつけて
いたようだった。

今更の様に当時を振り返ると、そんな偽る事の無い純粹に親友な
二人が羨ましかった。

自分の心のままに生きる人生が羨ましかった。

だからこそそんな二人が選んだ結末に言い知れぬ怒りを感じた。
ワイングラスが空になる。

いつの間にか会は終わり、心配する友人達の声をや所に宮内はふ
らふらと通りに出た。

今一番会いたいのは、砂羽。

本当に欲しいのは、砂羽。

ここに来てようやく気づいた事に宮内は愕然とした。

休日の午後7時は宵の口。

大きな引き出物を引きづりながら、彼は歩いた。

「もしもだぞ、もしも今日砂羽に会えたら、もう迷わないから。」

呟く彼に、すれ違うカップルが振り向き怪訝そうな表情をした。

「もしももう一度出会えたら、今度こそ俺、自分を捨てる。あいつの為にみっともない男になって、地に落ちてやるんだからな。」

ラブソディ・オン・ブルー

つづく

第八話 再会

そして彼女はそこに立っていた。ガラス越しにみる彼女は以前とはすっかり容貌を変えていたけれど、それでも宮内には一目で彼女だと解った。

重たげだった髪の毛は短くカットされ、くせ毛がくるくるとうなじで巻いていた。UKブランドのチェックのハイピングの施されたフレアスカートはふんわりと彼女の下半身にまわりついている。身長、伸びたのか？

一瞬見誤ってしまったかと思ったが、よく見ると以前は履かなかったはずの高めのパンプス。それにファーのついたパステルブルーのコート。

まるでファッション雑誌のモデルのようだと思った。

宮内はごくりと唾を呑んだ。まさか本当にここにいるとは思わなかったのだ。ホールの中ではハンドベルの演奏が始まったらしく、彼女がそちらの方へ頭を巡らせた。そのシルエットに胸が熱くなった。

彼女を変えたのは俺ではないんだ、と。

どう話しかければ良いんだろう。さっきまでの酔いは一気に引いて行き、咽が渴く。幸い彼女は一人で連れはいない。

“久しぶり。元気になっていたか？”

“すっかりきれいになったな。”

“いま、独りか？”

戸惑いながら、それでもプラネタリウムの入りをくぐった。

ハンドベルの音がほんの少し狂う度に“微笑ましく”ほころぶ彼女。そんな砂羽に宮内はふらふらと吸い寄せられているようだ。声をかけようとした瞬間、気づいたのは砂羽の方で、聞こえないほど小さな声を漏らし口元を押さえた。

「意外な所で会うなあ。」

何しろ二人が初めて会った場所だから。

しかしその後の言葉が続かなかった。ピンクのネイルにお揃いの口紅。目元もほんのり桃色に染めた彼女。自分の為じゃないのに可愛い砂羽を宮内は憎いと思った。

「お久しぶり。元気にしていた？」

そう砂羽が言えたのはほとんど条件反射だった。

内心の動揺を必死になって隠しながら、彼女は平静を装った。

彼の少し間延びした様な話し方に、ああ、宮内はあい変わらず宮内なんだと思った。同時に彼の事を鮮明に覚えている自分に気づき、“忘れるはずだったのに。”

と佐伯への裏切りがちくちく心に突き刺さる。

佐伯がこの場所を指定してきた時、何となく予感が有ったのだ。

宮内に会うかもしれないという。それは期待かも知れなかった。もしも会えたら人並みに可愛くなった今の自分を彼に見せたいという気持ちで服も選んだ。そのくせ本当に彼に会えるとは信じてはおらず、こうして顔を合わせてみて、期待していた事の愚かしさを噛み締めていた。

結局彼の目からすると、芋ねえちゃんは芋ねえちゃんで、見苦しい事には変わらないのだ。

砂羽はそんな自分が恥ずかしくなり、首元のベビーパールのネックレスを弄んだ。

宮内がため息をついた。

「今、幸せか？」

その問いに彼女はまつげを伏せて応えた。

「うん、申し分無いよ。大事にもらっているから。」

「そうか。」

そして再び沈黙が訪れる。

男の言いたかった事は咽もとまで出かかつてはその奥へと落ち込

んだ。

玉碎する覚悟だったんだろう？ そうだ、せつかく巡り会えたんだ。

「俺さあ……」

プライドを捨てたはずのその瞬間、彼女の携帯が着信を伝えた。

二人、見つめ合って時を止めた。

「どうぞ。」

宮内はさらさらと髪を揺らし頭を振った。そんな彼の仕草を見たくなくて、彼女は顔を背け携帯を受けた。

「あ、はい。砂羽です。」

その声の響きに男は体を硬くした。

ああ、そうか、と。

「いいえ、今来たばかり。大丈夫。迷わなかったよ。」

片手で会話口を覆いながら話す彼女を見つめながら、宮内は泣き出したい気分を噛み殺した。

男は気づかない。彼女が肩越しに感じるその視線に戸惑っている事に。

それはまるで売れ残った仔犬そのものだと思つた。

“その目は反則だ。”

その気持ちを悟られない様にぎゅっと携帯を握りしめた。

電話が切られ、二人にまた沈黙が訪れた。

意味も無く泣き出したい気持ちが湧き上がり、それを隠したい一心で

「何か用だった？」

と砂羽は短く言った。目を合わせる事も出来なくて再びネックレスを弄んでしまう。

男の目にはそれがまるで念珠を手にしているかの様に映っていた。
「いや、別に。」

何を言っているんだ、そう戸惑いながら後を続ける。

「お前が見えたから。ほら、しばらくぶりだろ。元気になっているか

なあって思っただけさ。何ヶ月ぶりかな、俺達、会うのって。」

4ヶ月と2週間。そう彼女に答えて欲しかった。でも彼女は

“さあ”

つてな感じで首を傾げ誤摩化す。

「何だよ、お前そんな冷たい女だったのかよ。」

彼は着信拒否の携帯の事なんか必死になって忘れようとした。

「久しぶりに会う友人に、それは無いんじゃないか？」

そんな彼の瞳に映ったのは明らかな作り笑いで、

「ってか、宮内さ、なんでこんな夜に独りな訳？あんたらしくないんじゃない？」

彼女が誤解した事は解った。また女と別れたから砂羽を抱きたいのだと……。だからたまたま見かけてもう一度よりを戻そうとしているのだと。

まあ、半分当たりか。

男の顔がくしゃりと歪み、胸の内が現れる。

“抱きたい。”

そして彼女の心がすつと一歩引いた。

「ご免。」

言ったのは男の方。

「俺、どうかしていた。ご免。」

それからずいぶんときれいになってしまった彼女から目を反らした。

「これから彼氏との待ち合わせだよな？この前の“大本命”？」

小さくうなずく彼女にかける言葉はもう無かった。キツく唇を噛み、笑いとも苦痛とも思えない表情を浮かべ深いため息をつくとき、男は片手を挙げきびすを返した。

第八話 再会（後書き）

宮内・・・・・・・・駄目なヤツ。

ハッピーバレンタインディ　せつかくなので“バレンタイン”なんか大嫌い！”なんていう、明るめのお話を別ページに載せました。気が向かれた方、遊びに来てくださいね。

第九話 望む事

結局佐伯は結局急な仕事が入ってしまった、砂羽は独りでイブを過ごす事になりそうだった。

「レストランを予約しておかなくてよかった。」

彼女は自宅のバスタブに浸かりながら自分に向かって呟いた。

本当は佐伯のマンションで過ごす予定だった。その為の花もケーキもチキンも用意していて、プラネタリウムデートの後受け取って帰るだけのはずだった。それなのに彼は朝から新潟へ行ってしまい、今日中には帰れないという。

本当は寂しい夜なのに何故かほっとする自分がいてひどくしゃくに触る。原因は解っている。宮内だ。

宮内の口惜しそうな、泣き出しそうな顔を忘れられない。彼はあの時本当は何を言いたかったんだろう。もしかしたらそれは自分が長い間望んでいた言葉だったかも知れない。

“愛している。”

と。でも、そんなはずあり得ない。彼にとっての私は非常食の乾パンだから。何も食べる物が無い時が来るまで見向きもされない、カップラーメンにも負ける乾いた女。彼は乾パンの賞味期限を確かめたかっただけ。

そのくせ婚約の日取りも決まった佐伯と過ごせぬ寂しさよりも、別の男の事で頭が一杯になってしまうという現実が悔しかった。

気がつくとバスタブのお湯はもう既にぬるく、暖まるはずだったその行為は砂羽の軀を冷していた。

暖まりたい、そんな気持ちでもエエシャンドンを開けた。コルクの弾ける軽快な音。溢れ出るゴールドンカラーの気泡は光を浴びてきらめきながら彼女の手を濡らす。それをただのビアタンブラーに注ぎぐつと飲み干す。佐伯のキャビネットにあったフルートグラス

を思い出しながらもう一杯を飲み干すと、熱い固まりが胃の中へと落ち込んで行った。

10時を過ぎた時計にイライラし、しばらく見ていなかったDVを再生する。バクダツトカフェ。太ったドイツ系のおばちゃんが旦那と離婚した後、流れて冴えない喫茶店みたいな所でバイトを始める話し。たいしたストーリーは無いけれど、そこで知り合ったおっちゃんが彼女の中に女神様を見いだすシーンが好きだった。いい歳をした中年女。でもその彼女は生き生きとしていて、本当に後光が射しているようだった。ある意味こういう“いい女”になりたいと願ったときもある。

タイトルソングの“コーリング ユー”が耳についつて離れない。混乱する頭で空になったボトルを台所に戻す。

誰かの声が聞きたくて、友人の菜々子に電話をするけれどいい。今更親の声なんか聞きたくない。それから不意に思いついた番号を回す午前0時。

彼は3コールで電話に出た。そのくせ何も言わなくて、沈黙だけが耳鳴りの様に頭を巡る。

「砂羽。」

ああ、彼には私だって分かったんだ。彼のアドレスに私の番号はまだ残っているんだ。そう思うと目頭が熱くなる。

私、何してるんだろう。

「ご免。ご免。ほんと。ご免。」

すすり泣きながら、

「悪かった。」

と電話を切った。

本当、何しているんだろう。

砂羽は膝を抱き、携帯を床に落とした。

どうして今更宮内なんだろう。何でこんな夜に彼の声が聞きたくなるんだろう。未来を約束したはずの佐伯の声さえ今は思い浮かばない。

彼に抱かれない訳じゃない。いや、それは嘘だと思う。抱かれない。抱かれて、二人揺れながら微睡み、真っ白になって、何も無い世界に行きたいんだ。

突然の電話、それから切れた携帯を男はじっと見つめた。慌てて彼女の電話に折り返しの電話をするけれど着信は拒否される。

「畜生！！」

何気なく立ち上がった足がもつれテーブルの上のウォッカのボトルが床に落ちた。ヒーターをつける事すら煩わしく、酒で体を温めていた。心が凍えそうだったから。

「糞っ！！」

つながらないと分かっている、何度も彼女の電話番号を繰り返す。

「畜生！！」

彼女は何を言いたかったのだろう。宮内はぐるぐると部屋を回りだした。

「畜生！！」

『仕事だもの。仕方がないよ。私の事は気にしないでね。それより無理しないでね。』

つい5時間前に電話に向かって囁いた彼女の声が蘇る。多分、今晚の彼女は独りだ。

寂しいのか？

いつかロータリーで見かけた大きな男の影が宮内の中をよぎって行った。まずまずの仕事をしているはずの宮内の目から見ても、その男は“大人”だった。それにセンスがいい。砂羽を見れば分かる彼に合わせようと必要以上の無理はせず、でもほんの少し背伸びをしている彼女は例えようも無く可愛らしく、そしてきれいだった。

だったらどうして彼女は俺に連絡をしてきたんだ？

「畜生！！」

つながるはずの無い携帯。この自宅に据え置き電話なんか無かつ

た。

男の浮気がばれた？幸せだって、言つてた矢先だぞ？

それならそれでいい。

宮内の心臓がとくとくと鳴った。

これは最後のチャンスかもしれない。今の砂羽は助けを求めている。彼は自分を納得させた。

男は手に持つそれを屑籠に投げ捨てた。彼女につながらない携帯なんかには用はない。

ふらつく足で財布を掴むと、結婚式帰りのだらしなく皺になった式服の上にコートを羽織った。

彼女のアパートまでタクシーで20分。

タクシー乗り場の脇にある閉店間際の花屋でありったけの薔薇を買った。今晚はクリスマス。

俺だって、プレゼントが欲しい。

泥沼の修羅場を予想しながら、宮内は砂羽を手に入れる為なら何でもすると今度こそ本当に心に決めた。

ラプソディ・オン・ブルー つづく

第十話 聖夜

うるさく鳴らされるドアホーン。それから叩き付ける拳の音。砂羽の頭の中で警戒音が鳴り響く。黙らせなければいけないけれど、出てはいけない。

隣の部屋の壁がどんどんと叩かれ、壁に寄りかかっていた砂羽の背中越し、ダイレクトにその衝撃が伝わった。

こうなると出ない訳にいかないから、よろめく体を支えながら彼女はようやくと鍵を外した。

冷たい外気が流れ込む。それから華やかな薔薇の芳香が砂羽を包んだ。そのくせ肝心の花束が彼女に渡る事は無く、男は有無を言わず彼女を抱きしめた。

唇を合わせ抱きしめ合いながら、お互いのアルコールの交じる吐息を甘いと感じていた。

砂羽には今自分がしている事が分からなくなっていた。ただ、目の前の男を愛しいと思う。

「瘦せたね。」

コートの中に回した両手は彼の背中をしっかりと掴んでいた。

「恋煩いさ。」

宮内は彼女の頭をしっかりと支え再び唇を交えた。絡まる柔らかい舌に我を忘れ、呼吸する事さえ忘れそうだ。吸い込む香りは、懐かしい砂羽の香り。抱きしめ合う腕に力がこもり、二人の間の隙間が完全に姿を消した。その時になって初めて凍えていたはずの男の全身に血が回り始めた。

「あつたけえ。」

それから彼女の顔を両手で挟んでこう言った。

「砂羽。愛してる。」

そう口にする事で男の心の中の重しがとれ、ふと軽くなったようだった。その緩んだ微笑みに彼が何を言ったかを考えられるよりも先

に、

「私も宮内が好き。」

と彼女は返していた。

「違う。」

宮内は苦笑しながら砂羽を抱きかかえると狭いベッドまで運んだ。

「俺は愛しているって言ったんだぜ。」

嘘でしょう？そんな問いが彼女の顔に湧き上がるから、それを押しやる様に呟いた。

「愛しているよ、砂羽。」

きよとん顔の彼女を尻目に、男は素早くコートを剥ぎ、ジャケットを脱ぎ、シャツを捨て、

「お前だけ。お前だけだ。」

みつともないほど歪んだ顔で見下ろしながら、彼女の柔らかなパジヤマの裾をたくし上げた。

「お願いだからさ、何も言うな。お前とこうして会ってるのが夢だったって事になってしまいそうで怖いんだよ。」

砂羽の頭の上で男が鼻をすすった。

「やっぱだめだわ。お前の事、誰にも譲れない。軀もつながってたいけど、心もつながってたい。」

そんな芝居がかった限りなく本気の台詞を

「馬鹿ね。」

彼女は彼の首に両腕を絡めて受け止めた。

砂羽のシーツはいつもブル―。その波の間を二人で泳いだ。

肌が摺り合う毎に二人の体温が上がる。

宮内の両手は失いかけていた彼女の輪郭を何度も愛でる様に上下し、時々拗ねた様に爪を立てた。

砂羽はひたすら彼にしがみついた。これからやって来るはずの大きな波を予感し、彼と一緒に呑み込まれる事を願いながら、はぐれ

ない様に。

お互いを結びつけ、小刻みに揺れては返し、時に強く打ち震わせる。

溶け合いながら、見下ろしながら宮内はほんの少し微笑んでいた。セックスなんて食欲と同じだと思っていた。生きる為の基本要求で、とりあえず食べておけば死なない。勿論好き嫌いや当たり外れもあって、いつも同じものを食べていたら飽きてしまう。

「砂羽が好きだ。」

今になって思う。まったくの別物だ。

「お前、宮内になる気はないか？」

あつけにとられた顔をしている砂羽に、

「お前、宮内砂羽になれ。」

困った様な、今にも泣き出しそうな顔の彼女。その蕩ける様な軀を強く抱きしめ、耳元ではつきりと、

「俺の女房になれ。俺、やっぱお前じゃなきゃ駄目なんだよ。砂羽」という時だけ俺は安らげるんだ。だから、

彼の瞳はまるで雨に濡れた仔犬。

「俺を見捨てるな。」

そう言いながらその動きを速め、彼女を遠くへと導いた。

砂羽の軀の中に、沢山の流星が流れ込んで来るようだった。

ラブソディ・オン・ブルー つづく

第十話 聖夜（後書き）

気がついたらそう言う場面に突入しておりました・・・。
でもってそろそろ三角関係に付きもののアノ場面です

第十一話 バッティング（前書き）

作者 * 謎のロシア人 ひろせ・シュラバスキー・ながる なん
ちやって

第十一話 バッティング

佐伯が仕事を終えたのは午前2時だった。さすがにそれから砂羽に連絡を取る事ははばかられ、独り駅前のビジネスホテルに向かう。本当は今頃二人で温かいベッドに包まっていたはずだと苦笑いをしながら。

去年までの6年間は独りで過ごすクリスマスをうつとうしくなくて良いものだと思っていたのだが、さすがに今年は違っている。

初めて一緒に過ごすイブの夜に彼女を独りで置いておく事に罪悪感を覚え、始発で帰ろうと目覚ましをセットした。

きつと彼女は拗ねているに違いない。そのくせ、その事を表に出したら大人げないと思い、

“寂しくなんか無かったよ。だって、仕事だったんでしょ？”

それから、

“お疲れさま。”

とか言いながら、目を逸らしたりするんだ。

そんな彼女の姿を想像し、彼はくすくす笑った。砂羽は肝心な所で素直じゃない。絶対に、

“私より仕事の方が大事なの？”

なんて馬鹿げた事を言ったりしないし、ましてや、

“寂しかった。”

なんて口にするはずが無い。そのくせ隠し切れない仕草で訴えている。

だから彼女を守ってやりたいと思う。

時刻は午前8時を少し回った頃だった。二人は空が白み始めるまで何度も愛し合った。にもかかわらず、宮内はもう一生分の眠りを得た気がした。

それは夢という事とも少し違う、ひたすら堕ちて行き、それから

光りの輪の中へと浮上した、そんな感覚だった。

その時だ。玄関の先に人の気配を感じ宮内は飛び起きた。

あの男だ！！

砂羽に毛布をかぶせ、素早く下着を拾い上げる。

その時静かに鍵が差し込まれる音が響いた。

佐伯と砂羽は何回目かのデートの時に上越の料理を出す小料理屋に行った事がある。その時彼女が笹団子を好きだと言っていた事を佐伯は覚えていた。彼女の御機嫌取りに、温めたそれを二人並んで頬ばるのも悪くない。だからキオスクで買った冷凍の笹団子を手には彼は砂羽のアパートへ直行した。自宅に掛けた電話で彼女がマンションにいない事は分かっていた。というより、何となく予感があったから。遠慮がちな彼女は渡してある合鍵で部屋に入った事が無い。いつでも彼が招き入れてくれるのを待っていた。

その小さな包みをぶら下げながら彼は彼女の扉を開けた。来年のイブには必ず休みが取れる様に申請しなくては、と思いながら。

最初に目に入ったのは真っ赤な花びら。少し傷みかかけた花びらの強すぎる香りに目眩を覚え唖然とする。その奥で何かが動く気配を感じた。

1DKの細長い部屋。ほんの5メートル先に砂羽は寝ているはずだった。しかし、自分が目にする黒い影は何故か男性的だった。

部屋を間違えたか？

その思いを急いで打ち消す。鍵が回ったのだ。間違いは無い。動転しているはずがいつもの習慣で靴を脱ぐ。音を立てない様に歩を進めそこに立つ裸の男を認めた。

男は自分がやって来る事を予期していたのだと直感した。自分より少し背の低い細身の男。髪は栗毛。今時の男らしく左耳のピアスが光った。少し痩せ過ぎだがお世辞抜きで造作の良い顔だった。そ

れからそのプライドの高そうな目で鋭く佐伯を見つめかえした。

彼はゆっくりとした動作でボクサーショーツを身に着けると、挑む様に真つすぐに立った。

床に散らばるのは男と女の抜け殻。ベッドの上でこんこんと眠る砂羽。彼女の露になっっている首筋から鎖骨にかけて、佐伯の身には覚えの無い印が残る。

この状況を理解できないはずが無い。彼女は浮気をしたのだ。

佐伯は緊張以上にため息をついた。

彼女に限ってそんな事は無いと信じていたからこそ、余計に裏切りが手痛い。そう思うと降って沸いた様に怒りが込み上げる。

何故？

拳が白み、首筋が怒張する。

誰を殴ってやろうか？

先に動いたのは宮内で、ほんの2メートルほどの距離で空気が張りつめた。

ラプソディ・オン・ブルー つづく

第十一話 バッティング（後書き）

これからのシーン書きたさに始めたお話です。

ここまでの宮内はまだまだ “上辺だけ” やろうつと思えばなん

とか出来そうな範疇。

まだまだ頑張り足りませんから。

彼には（廣瀬好みの）大人になってもらいます

第十二話 戦い

それは佐伯にとっては予想だにしなかった事だった。

男は土下座をしたのだ。

自分の足下に頭を擦り付ける男を見下ろしながら、彼は耳鳴りを感じていた。

何も言わずに体を丸めている若造を、いつもの佐伯ならば軽くあしらえただろう。

もし、男が自分に殴り掛かってきたとしたら、勝てたと思う。

もし、しつぽを丸めて逃げ出していたのならば、立ち直れない位叩き潰してやったとも。

それから、こんな屑みたいな見てくれだけの男に身を任せた砂羽の事をののしってやれただろう。

だが目の前の男は許しを乞うていた。でもそれは砂羽と寝た事じゃない。

佐伯に身を引く事を乞うているのだ。

その頭をかち割ってやれたならばどれだけすつきりするだろう。それとも全体重をかけてその腹を蹴り上げてやろうか。

しかし多分、彼はおとなしく蹴られるままに蹴られるのだろう。無抵抗で。

それは砂羽を守る唯一の手段だから。

これはきつと砂羽が望んだ結末なのだ。

そう思うと、どうしようもない苛立ちと脱力感が佐伯を襲った。握りしめていたはずの拳から力が抜け、自分よりも目の前の恋人同士が哀れになった。

哀れ？その感情は何だろう、と佐伯は戸惑った。可哀想なのは、

自分の方じゃないか。

年明けには結納の日付も決まっていたのに。自分が再婚になるかと内々で話しを進めていたのだ。いつか二人の間に出来るはずの子供達の為に学資を貯めなければいけない、などと考えたり、もし転職になった場合、彼女は仕事を辞めてくれるだろうかなどと考えたり。

ふと佐伯は何故自分が彼女を選んだかを思い出していた。

控えめで押し付けがましくない思いやりを持つ彼女。必要以上に飾らない、古い言い方だけれど

慎ましい女性”？

いや、それよりも、

“身の丈にあった。”

その言葉がキーワードだった。

砂羽と自分とならば、身の丈にあったこれからの人生を送る事が出来る、穏やかに年を重ねる事が出来る、そう感じたという事を。

うずくまっている男は一言も発せず、微動だにしなかった。

この男は砂羽に中に何を見いだしたのだろうか？

沈黙が見守る中で、彼はしばらくその男を見下ろした。

もし今ここで拳を振り上げ殴り掛かった相手が砂羽だったとしたら、彼はどうするだろう？

そう思った瞬間、佐伯は自分の肩がびくつと動いたのが分かった。

と同時に、男の体に緊張が走るのが見えた。

宮内は男が発する怒気をそのまま全身で感じていた。

パニックを起こしそうになる頭に

“予期していた事だ。”

と何度も繰り返し言い聞かせた。

怒鳴り、猛り狂うはずの男は一言も発しない。その事が良い事なのか悪い事なのか、宮内には分からない。

ただ、砂羽の事をこれ以上傷つけたくはなかった。

今までさんざん弄んできた。自分の事を好きだつて気づいていたのにそれを無視し、

都合のいいときだけ良い様に抱いてきた。

やっと人並みに幸せになろうとした彼女をまたしても踏みにじっている。

そして今更の様に気づく。彼女を傷つける事は、自分が傷付くより辛い事だと。

目の前に立ちふさがる男が自分を観察しているのがよく分かる。その自分を失わない余裕のある態度が余計に彼の罪悪感を助長させた。

彼女はこの男と幸せになるはずだったのだ。

宮内は下げていた頭をより低く床に押し付けた。張り合わせの絨毯は荒く、繊維は彼の額に傷を作った。

俺の体で済むのならいくらでもくれてやるから。好きなだけ殴つて、蹴りもしてくれ。

だから、砂羽には指1本でも触れてくれるな。

男の肩が微かに揺れ、来る　と感じた。その瞬間、宮内の中の炎が揺らめいた。

やるならやれよ。ただし、彼女にだけは手出しさせるもんか、絶対に。その時は覚悟しろ。

ラブソディ・オン・ブルー　　つづく

第十二話 戦い（後書き）

宮内、頑張ってます！！

ところで 春エロス 2008 なる企画に参加する事になりました。

3月20日 からの開催予定です。
何となく魔が差した時にでも（おいおいって）遊びにいらしてくださいね。

読もう！サイト様の公式ブログからお入りになってみてください。
同じエロスでも千差万別。

あつ、書く人の個性ってこんなに強いんだって、目から鱗です

第十三話 選択（前書き）

最終話になります。

第十三話 選択

何かの気配で砂羽は目が覚めた。ぼんやりとした視界に入ってきたのは、ブラウンの光彩。

「んっ・・・」

有無を言わず彼の唇が砂羽のそれに重なる。ついはむ様な、優しいキス。それから見つめ合い、彼は

「愛してる。」

と呟いた。

夢から覚めても夢を見ている、そんな気分だった。

昨日の夜の事は現実だったんだ。

思わずシーツを掴む彼女に宮内はくすりと笑った。

「引くなよ。」

それから照れた様に笑うと、突然真顔になって彼女を見下ろした。

「なあ、砂羽。目え閉じる。」

言葉とは裏腹な有無を言わせないその口調に、彼女はたじろぎながらも従った。

「お前さ、俺かあの男かどっちか選べ。言っとくけどな、俺だって後5年もしたらもつと良い男になるんだからな。」

驚きに目を見開くと、伏せ目がちな宮内が視線を返す。

「目え閉じろって言っただろう？」

それから彼は砂羽に聞こえない様に小さなため息を漏らした。

「よく考えてみるよ。で、よく考えて、結論出せ。」

彼女はキツく目をつむると、反射的に宮内にしがみついた。

「考えられないんだけど・・・」

馬鹿なのは分かっている。それでも頭でなんか考えられなかった。本能とでも言うのだろうか。自分の根底の所で宮内を選んでしまう愚かな自分が情けなかった。

「どう考えたって、無理。」

宮内といると佐伯の穏やかな笑顔が霞んで消えて行ってしまうのだから。

はつきりとした返事を出さない砂羽の心を彼は反対に読み取った。

「俺じゃ、駄目か。」

仕方が無いなあと、彼は彼女の背中を擦った。

「じゃあさ、俺の本気を証明してみせるから。とりあえず、幸せな花嫁のお約束でジュースブライドな。ダイヤの指輪は額面で3ヶ月分。今日にでも選びに行こう。でもって、明日にはお前の両親に会いに行くんだ。」

砂羽は言われた意味が分からず、ぽかんと口を開けて彼を見上げた。昨夜聞いたような気がするプロポーズは所詮都合のいい空耳だと思っていた。

「まだ足りないか？じゃあ、新婚旅行の行き先はお前が決める。有休入れて10日休んでやる。住む所はお前が妊娠している事にして家族用の借り上げ社宅用意させてやるから。都内の一等地のマンションだぞ。」

この男は何を言っている？頭がついて来れずに戸惑う彼女に、男は目を細めた。

「毎週一回は花を買ってかえる。え〜と、浮気はしない。飯作るのも手伝う。風呂も洗う。食器洗い機は、買おう。」

彼は短くなった砂羽の髪を弄びながら、うなじに唇を寄せた。

「それからえっちは週2回確約。」

「馬鹿っ！！」

思わず叫んだ砂羽に宮内は笑った。

「確約だから、もっとしてやるよ。足りなきゃ今から貯金してやるうか？」

剥がれた毛布で、日の光の下に彼女の裸体が晒された。

「きゃあっ！！」

「かまととぶるなって。」

さっきまでの真剣な表情はどこかへ飛んだ宮内の変わり様に砂羽は

たじろいだ。素肌を擦り合わせて見下ろす彼の唇の端は薄笑いのようにつり上がっている。でも目は笑っていなかった。眉毛さえも、微妙なハの字のライン。

「ほら、な。返事しろよ。俺の事選ぶって言えよ。」

その声が微かに震えていて。

そうか、と。砂羽は初めて気がついた。

こいつはこいつで、不安なんだ。いつもは強気な俺様が、本当に本気だから、怖いんだ、と。

そして自分は、こいつがいつも外に出さずに堪えている不安を感じていたから、惹かれていたんだ。

こいつはこいつで、多分だけど、私にだけ、本心みせてくれていたんだ。

なんだ、そうだったんだ。お互い様で、離れられないんだ。

うふふ、そんな笑いが彼女の口から漏れた。

「何だよ。」

彼は眉をひそめた。

「秘密。」

砂羽はおかしくって笑った。こいつでも焦るんだ。すかしていて、文句つけようがなくて、傲慢な、こんな俺様ヤローでも焦る事があるのだ。しかも、こんな私みたいな女の事で。

「教えない。」

「なっ!!」

宮内が慌てる所をお目にかかれるなんて信じられなかった。ましてや、こんな事になるうとは。なんて、なんて！

「黙って。」

彼女は大きく深呼吸をした。ここで言うのはしゃくだけど、我慢していたけれど、言わずにはいられないから。

「宮内が好き。」

彼の目がきらりと光った。それに気づいたから、

「あ、でもね、今の私は宮内よりいい男がいるって事知っているん

だからね。それでもあんたの事選んであげるんだから、あんたも頑張ってよね。それに・・・」

言いよどみ、その両手で彼を突き放した。

「はじめだけは、つけないとね。」

その言葉に宮内はゆっくりと彼女から身を引くと、顎を引き締め頷いた。

「二人ではじめつけに行こう、な。」

それから改めて彼女を優しく抱きしめた。

ラブソディ・オン・ブルー エピローグへ

第十三話 選択（後書き）

実質最終話になります。

これまでおつき合いいただきありがとうございます。

良かったら他のも書いていますので、遊びにいらしてくださいね

ところで、宮内、頑張ったでしょう？

エピローグ

梅雨の季節だというのに、その日だけは妙に晴れていてぽかぽか陽気。まるで春がもう一度来たかの様。

それなのに披露宴に集まった人々は、お互い変な顔をしていて。何しろ主役のキャラが日頃とはまるで正反対なものだから。

地味顔だったはずの彼女は思いのほか化粧映えするという事が発覚し、8センチのヒールも何のその。

オフショルダーのウエディングドレスがこれでもかっと咲き誇り、すんなりとしたタキシードの隣りで宝石の様に光り輝いていた。

新婦の関係者は

“マジっ”

と仰け反った。

後にその時の写真をみた同僚の何人かは

“逃がしたお魚ちゃんはなんとかかんとか”

と言ったとか、言わなかったとか。

対して、饒舌でならした新郎君は注がれるビールを飲み干しながら、

「ありがとうございます。彼女の事、幸せにしますから。」
と繰り返す。

くだけた友達があきれ顔で

「よっぱどあっちの相性が良かったんだなあ。」
と冷やかすと

「ちげ（違）うよ！」

と手を振って彼女の方をこっそり盗み見る。

「そう言う事じゃ無いって。」

慌てる所がどうにも阿呆らしい。

多分弱みを握られているんだ、いや単純にできちゃったんだろう。そして最後、彼はMの気があり、女王様にすっかり飼いならされたんだ、などと言う事に話が落ち着く。

実はそれが正解。

彼は下僕。忠犬の様に彼女の足下で眠る。何しろそこが彼の居場所だから。

そしてナイト。彼女を守る事で初めて男になれるから。だから彼女は抱きしめる。そのままの彼を。彼女以外誰にも与える事のできない安らぎと庇護を込めて。

ラプソディ・オン・ブルー

F i n

エピソード（後書き）

皆様、いかがだったでしょうか。

読み終わった後、何となく幸せな気分になってもらえると嬉しいです。

ここまでおつき合いいただきありがとうございました。

現在このお話、コミック化のオファーを頂いております。
近日詳しいご報告さし上げる事が出来るかと思えます。

もし良かったらブログに遊びにいらしてくださいね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4991d/>

ラブソディ・オン・ブルー

2010年10月10日01時25分発行